

すがわらでんじゆてならいかのみ

菅原伝授手習鑑

〔解説〕

延享三年（一七四六）八月、大坂竹本座初演。竹田出雲・三好松洛・並木千柳らによる合作。全五段。近松門左衛門の「天神記」を基本とし、当時のニュースである三つ子の誕生などを取り入れ書き下ろした物。二段目に菅丞相と苺屋姫の別れ、三段目に白太夫と桜丸の別れ、四段目に松王丸と小太郎の別れ、と、それぞれの段の切に親子の別れを描いており、「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」と共に、時代物の三大名作として親しまれています。

〔あらすじ〕

【初段】延喜帝の御代、左大臣藤原時平、右大臣菅原道真（菅丞相）が政治の中心となっていたが、反逆心のある時平は、菅丞相を邪魔に思っていた。

帝は病のため、渤海国からの使者に対し、弟君の齋世親王が名代となる。

菅丞相の佐太村（現在の大阪府守口市内）の領地は、白太夫（四郎九郎）という百姓が預かっており、白太夫には、梅王丸・松王丸・桜丸という三つ子がいたが、それぞれ梅王丸は菅丞相、松王丸は藤原時平、桜丸は齋世親王の舎人（皇族など）につかえる下級役人）となっていた。

齋世親王は、天皇の病氣平癒祈願の参拝の折、桜丸と女房八重の手引きで、苺屋姫（菅丞相の養女）と密会をするが、時平の家来が詮議に来たため、親王と姫は、行方をくらまし、その後を桜丸が追う。

一方、名筆の誉れ高い菅丞相は、以前、不義の科で勘当していた武部源蔵を呼びだして、菅家の筆法を伝授する。兄弟子の希世の妨害に遭いながらも源蔵は筆法を伝授されるが、勘当は許されない。

時平は、齋世親王と苺屋姫の行方が知れないのは、菅丞相が親王を帝位につけ、娘を后にして、自分が実権を握ろうとしている策略であると、讒言(他人を陥れるため有りもしないことを上の人間に言うこと)する。そのため、丞相は閉門、流罪となる。危険を感じた舍人梅丸は、丞相の実子菅秀才を源蔵夫婦に預ける。

【二段目】桜丸は齋世親王と苺屋姫に追いつき、姫の実家の土師の里へ向かう途中で、菅丞相が流罪になった事を知り、一目会おうと行列の後を追う。安井の岸で汐待ちをしている一行に桜丸が追いつき、対面を願うが、菅丞相の罪が重くなるとして許されない。苺屋姫は、姉、立田の前に伴われて実母覚寿のいる道明寺へ向かうが、役人判官代輝国の計らいで丞相一行も土師へと向かうことになる。また、齋世親王と桜丸は都へと別れていく。

土師の里では、覚寿が、丞相が罪に問われたのは苺屋姫のせいだとして、姫を杖で折檻する。それを菅丞相の声に止められるが、不審に思った覚寿が襖を開けると、そこには伯母への形見として丞相自らが彫った木像があるばかりであった。

立田の前の夫、宿弥太郎とその父土師兵衛は、時平に頼まれ、偽の迎えになり丞相を連れ出そうと計画していたが、それを知った立田の前を殺す。偽の迎えが来て丞相を連れて行ったあと、覚寿は立田の前が殺されたことを知って宿弥太郎を刺す。そこへ、輝国ら本当の迎えが来るのだが、実は、偽の迎えに連れて行かれたのは丞相の木像で、人々は奇跡に驚く。そして、全ての悪事が露呈し土師兵衛も殺される。

丞相は覚寿や苺屋姫と別れて、名残を惜しみつつ太宰府へと旅立つのであった。

【三段目】

梅王丸と桜丸は吉田神社で出会い、通りかかった時平を襲おうとして、舎人である松王丸と争うが、父の賀の祝を済ませてからと、その場は別れる。

祝の日、三兄弟の嫁達、春・千代・八重が集まり仕度をしている。四郎九郎は七十の祝に白太夫と名を改める。白太夫が八重を連れて氏神参りに行っている間に、梅王丸と松王丸がやってきて喧嘩を始め、白太夫が大切にしている菅丞相の御愛樹、梅、松、桜のうち、桜の枝を折ってしまう。

帰ってきた白太夫はそれを見ながら何も言わない。松王丸、梅王丸夫婦が帰った後、納戸に忍んでいた桜丸が現れ、丞相流罪の責任をとって切腹する。八重も後を追おうとするが、物陰に潜んでいた梅王丸夫婦に止められる。白太夫は八重を梅王丸夫婦に託して筑紫へと向かうのであった。

【四段目】〈天拝山の段〉 太宰府の菅丞相は時平の叛逆を知り激怒し、雷神となつて都へ飛ぶ。

丞相の御台所は北嵯峨に隠れ住み、春と八重が仕えている。春の留守中に時平の家来が襲来し、八重は討ち死に、御台所は山伏に連れ去られる。一方、武部源蔵夫婦は、京のはずれで寺子屋をいとなみ、若君菅秀才を我が子として匿っていたが、これを時平に知られてしまい、首を討てと命じられる。源蔵は思いあまつて、その日寺入りしたばかりの子供、小太郎の首を切ってしまう。見分役である松王丸は、その首を秀才の首と認めて帰って行く。そこへ、子供の母親がもどる。実は、小太郎は松王丸夫婦の子供で、身替わりを覚悟で連れてきたという。松王丸も現れ、心ならずも時平に従ってきたが、これでやっと菅丞相の恩に報いる事が出来たと語るのであった。北嵯峨で御台所を救い出したのも、実は松王丸で、若君と親子の対面をする。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。 (一般社団法人 義太夫協会発行)

天拝山の段

君を思へばよやヨホイホ、結ばれ糸のハレナ、
解けぬ心がつろござる、イヨつろござる、辛き筑
紫に立つ年月。御痛はしや菅丞相、讒者の業に罪
せられ、埴生の小屋の起き伏しも、昨日と暮れて
今日は早や。

「うそ淋しい不自由なお住居、一年の日数は立て
ど月見花見に出もなされず。今日は何と思召し牛
引けとある御意が出て、私が皺も腰も、ア、延び
やかな春の野面。安楽寺へ御参詣は御帰洛の御立
願でござりませう」

「いやとよ、我に科なければ仏に苦勞かけ奉り、
身の上祈る心はなし。讒者の業としろし召さば、
罪なき事も世に顕はれ、帰洛の勅詔下るべし。そ

れまでは菅丞相、月にも花にも目は触れず、私な
き臣が心、帝はしろし召されずとも、天の照覧明
らかなり。安楽寺へ志すはこの暁、不思議の靈夢。
菅丞相が愛樹の梅、今如月の花盛り、都の住居思
ひ寝の、枕の硯引寄せて、筆に任せて書くばかり。

『東風吹かば匂ひおこせよ梅の花、主なしとて春
な忘れそ』と、心を延べてまじろ睡みに。妙なる天童
わが枕に立たせ給ひ、『汝憐憫の心深く、仁義を守
る忠臣の功、いさおし心なき草木まで情を受けし主を慕
ひ、花物言はねどその証、安楽寺へ詣で見よ』と、
示現によつて」

と宣ふところへ、安楽寺の住僧、杖を便りに老の
足、『それぞ』と見奉りしより、小腰をかぐめ立ち
寄れば、丞相鞍より下りさせ給ひ。

「住侶の歩行はいづくへぞ。我は貴院へ行く折か

ら、是にて対面祝着々々」

「ハア、愚僧儀も他ならず。公の御目に掛かりたく、参る子細余の儀にあらず。夜前不思議の霊夢の告、『御慈愛の梅一樹、配所の主に見せよ』とある、示現に変わらぬ観音堂の左の方、一夜に生ひ出づる不思議さよ」

と、語るも聞くも正夢の、割符を合はせし如くなり。

「これより寺へは程近し」

と、住侶伴ひ御歩路おんかちじ。安樂寺に入給へば、『それぞ』としるき梅花の薫かおり、袖に留木の心地せり。

「こりや不思議、こりや希代ぢや。申し丞相様、道すがら御住持の夢咄、へ、何をやらるゝやら、そんな事がよう有ふかと誠しない事疑ふておりました、ガ来て見てびつくり。この木の技ぶり花

の匂ひ、佐太のお下屋敷に預つておりました、ヲ、それぢや／＼その梅でござりまする」

と、床几の傍にちよつ蹲ひ、口も心もありのまゝ見へた通りの律義者。花の詠めながに一人の、興を催しひとしおをはする所に、

「ソリヤ喧嘩よアリヤ抜いた、切合ふてソリヤ来るは、寺内へ入れな、門打て」

と言ふ間あらせず踏込み／＼、打ち合ふ戦ふ侍二人、寺僧は驚き白太夫、御座を囲ふて、

「ア、コレ／＼、見れば双方旅装束、喧嘩は振り物とあつてから、こゝで仕舞ひは付けさせぬ。出やれ、出やれ」

と言ふをも聞かず切合ふ一人は我が子の梅王、
「コリヤマアそちは何として、ハアひあいな切られな」

と氣を揉み焦る親心、声の助太刀相手の刀、梅王に打落され、逃ぐるをすかさず飛びかゝり、片手掴みにもんどり打たせ、膝に固めし健氣の振舞ひ。

「ヤレ／＼出かした手柄、手柄、やれ手柄、手柄はしたが喧嘩の次第、次には其方そちが下つた様子、都の事を案じてござんます。幸ひ是に丞相様、様子一々申し上げい」

「ハツ、ハ、ア、恐れながら梅王が念願達し、変らせ給はぬ御尊体、見奉るは生涯の本望。都に御座あるお二人様、世を忍ぶ御身なれば、一つ所に置きまされず、若君様は武部源藏に預け置き、私わがが妻桜丸が女房、八重と春とは御台様の御介抱。御身の上は差置かれ『配所の様子見て参れ』と、仰せに幸ひ出船の手番てつがひ、天運に叶ひ日和まん、千里一はね日数もこめず、夜前この地へ筑紫船、

乗合ひの中に時平が家来鷲塚平馬。この梅王を見知らぬ馬鹿者、ふづくりかけて様子を問へば、『昔丞相を殺しに来た』と汝おのれが口から最期を急ぐ。寺にござるをよう知つて直ぐに仕掛ける不敵者、梅王が御土産」

と、早縄掛けてぐつと締め上げ、縁柱に猿繫ぎ、心地よくこそ見へにける。丞相御悦喜浅からず、「恋しき都の様子を知らず、忠義の花は有情の梅王。示現によつて飛来たる花は非情のこの梅の木、有情非情も隔てなく昔丞相を慕ひ来る、梅に褒美」の御言の葉、

『梅は飛び桜は枯るゝ世の中に、何とて松のつれなかるらん』。つれなかるらん松王は時平が舍人、枯れし桜は宮の舍人、梅王はわが舍人、花の栄は安楽寺」

その名も高き飛び梅の、不思議は今に隠れなし。

「ヤイ梅王、ありがたい今の御歌。この梅に准なぞらへ

その方をお誉め遊ばし、『桜は枯るゝ世の中』とは

死んだ倅を御悔み。『つれなかるらん』とある松王

めは、時平に追従しておるな」

「ホ、親人の推量違はず、兄弟といふも穢らはし

い。畜生めは差置いてさす敵はこの鷲塚。サア時

平が工たくみ白状せい、いやと言はば刀の引導、どう

ぢや／＼」

と立かゝる、

「ア、コレ聊爾あるな。主従の義を立て抜き、命

に替へて言はぬは古風、言はして置いて殺すも古

風、新らしい助かる様に残らず申す。時平殿は王

位の望み、邪魔になる菅丞相取つて立帰れ、軍

陣の血祭して大望の旗を挙げ、天皇、親王、院の

御所、片端仕舞ふて天下を一呑み。身共も公家に

なる楽しみ、空悦びの裏が来て、恥を曝す縛り縄

コレ。早ふ解いて下さりませ」

と時平が謀叛一々残らず、聞こし召されし菅丞相、

柔和の形相忽ち変り、御眼尻に血を注ぎ、眉毛逆

立ち、御憤り、都の方を睨み付け、物狂はしく立

ち給へり。白太夫びつくりし、

「知れてある時平が工み、今聞いたか何ぞの様に、7

ついで覚へぬ怖いお顔、こゝから睨ましまして

も都へは届きませぬ。御持病の瘡つかえが発れば、チ

エ、悲しうござります」

と老のくどく物案じ。

「やおれ梅王、白太夫。時平の大臣が謀叛の企て、

聞き捨てられぬ御大事、赦免なければ帰洛も叶は

ず、王位を望む朝敵と、しろし召されぬ玉体危し。

臣が忠義徒らに此所に朽ち果つる骸からだは虚名蒙るとも、死したる後は憚りなし。靈魂帝都に立帰り帝を守護し奉らん。天に誓ひの我が願ひ、驗しるしは目の前」

白梅のずあいぼつきと、折取り給ひ、

「朝敵一味の倭人わいじんばら、退治の手始めこれ見よ」

と、枝にて丁ど打給へば、平馬が首は飛梅の、ずあいも花の乱れ焼き、誠の剣も及びなき、梅の名作御手の内、親子は恐るゝばかりなり。

「ヤア汝ら。かゝる大事を聞くからは片時も早く

都に上り、時平が工み奏聞せよ。我は、見上るこの高山絶頂に三日三夜、立行荒行根気を砕き、梵天、帝釈、閻羅王、三天王に誓ひを立て、魂魄雲井に鳴る雷いかずち。十六万八千の首領となつて眷属引連れ都に上り、謀叛の奴ばら引裂き捨てん。現世

の対面これまでなり、いそふれやつ」

と御声も、共に烈しき疾風はやちかぜ、吹き立てくく本堂の、覺破れて庫裏くら方丈、葺遣戸は木の葉の如く、庭の立木も飛梅も、花も砂いさごも吹しきる。親子も住持も大きに驚き、

「期も来らざる御身を捨て、天帝へ祈誓あり。御本意は達するとも、御台、姫君、若君の御嘆きはいかばかり。留まり給へ」

と御袖に、取り付く梅王白太夫、弓手馬手へ刎ね飛ばし、

「住僧いたくな留め給ひそ。早や天帝の恵みによつて、形はこのまゝ鳴神の、不思議を見せん」

と散り残る、梅花を取つて口に含み、天に向つて白梅花、渦巻く花卉はなびら火焰となつて、雲井遙かに行末は、怪し恐ろし